

サプライズ・エンディングの短篇小説

—O・ヘンリーの『二十年後に』を中心に—

金子 光 茂*

【要 旨】 短篇小説はアメリカ文学では文学ジャンルとして確固たる地位を占める。元々それは広大な国土の隅々まで届けられた定期刊行雑誌類に読み物として掲載され、爾来、高い人気を保持し、さらなる発展を遂げ、今日に至っているのがアメリカ短篇小説である。独自の伝統の賜物といつてよい。

そういう短篇小説の中で、意表を突く結末で物語を締めくくる短篇がある。この結末はサプライズ・エンディングとして知られるが、その手法を多用したのが大衆作家 O・ヘンリーで、このことから O. Henry's ending の異名をとる。

本論では『二十年後に』という短篇に焦点を当て、その技巧の妙を分析する。さらに物語の解釈をとおして、アメリカの夢の実現に邁進する人々のありようを糾す世相批判を読み取る。

さらにサプライズ・エンディングの短篇が「驚きの結末」を用いて功を奏するためには、情緒的深みと信憑性のあるストーリーの構成に加え、緻密に編まれたプロットの上に成り立つ迫真性を具備した物語でなければならぬという結論に至る。

短篇小説とは何かを考えあわせた上で、以上の諸点を明らかにした。

【キーワード】 短篇小説 サプライズ・エンディング O・ヘンリー

I

アメリカでは、英国と違い、短篇小説が目ざましい発展をとげた。R. B. ウェストが言うように、「アメリカの作家が最初からその発展に参加できた」¹⁾のがアメリカ短篇小説である。これにはアメリカ独自の事情があった。

エライアス・リーバーマンに言わせると、その事情とはこうである。アメリカは「急速な領土の拡大と人口増加によって、それに対応する読み物の需要を生んだ。定期刊行雑誌の供給は常に増大した。この手の雑誌は、人の興味を惹く題材で埋めねばならなかったため、短篇小説にお呼びがかかり、雑誌の紙面の不足は短篇小説が埋め尽くすことになった」²⁾ というのだ。こうして短篇小説は、手軽に読めるアメリカ国民の読み物として、定着した。風土的文化的事情

平成 18 年 5 月 23 日受理

*かねこ・みつしげ 大分大学教育福祉科学部アメリカ文学教室

がアメリカ短篇小説をアメリカ文学独自のジャンルに押し上げたといつてよい。

そういう短篇小説のなかに、意外な結末で終わる物語がある。こうした意表を突く結末をサプライズ・エンディング(Surprise ending)とかツイスト・エンディング(Twist ending)という。別名 O. Henry's ending と呼ばれる。なぜなら、本名 William Sydney Porter こと O. Henry (1862-1910) がこの手法を得意とし、多用したからである。

O・ヘンリーは『賢者の贈り物』"The Gift of the Magi"や『最後の一葉』"The Last Leaf"で世に知られる。だが、サプライズ・エンディングを用いて世界的名声を博した短篇となると、ただ一つ『二十年後に』"After Twenty Years"をおいてほかにはない。³⁾

ここでは「意外な結末」で名高い『二十年後に』に焦点を当ててみよう。まず物語の概略を見たあと、構成を分析し、解釈を加え、サプライズ・エンディングの短篇小説とは何かを考察する。これが本論の狙いである。

II

『二十年後に』はごく短い話である。話は大きく二つの部分から成る。二分割できる話の構成を、便宜上、第一部と第二部と呼ぶことにして、話の概略をみておこう。

(第一部)

警官が巡回している。夜の十時になろうかという時刻だ。ある静かな通りである。雨もよいの冷たい風が吹きつけるので人影はまばらである。警官は「治安の守護者をみごとに絵に描いたような姿」だった。ただでさえ早々と店じまいをする地区なのだ。たまにタバコ屋や終夜営業の軽食堂が明かりをつけているだけで、どの商店もとくに店を閉めている。一帯は暗い。

警官は街区の中ほどに来て、急に、歩速を落とす。金物店の入口の暗闇に火のついていない葉巻をくわえた男が立っているのだ。警官が近づく。弾かれたように男はまくし立てた。「大丈夫ですよ、お巡りさん。友だちを待っているだけなんですから」と言つて、二十年前に親友と交わした約束を果たすためにここにいるのだと説明する。

男はマッチで葉巻に火をつけた。青白い角張った顎、鋭い目つき、右眉毛の近くの白っぽい小さな傷痕、大粒のダイヤモンドを嵌め込んだネクタイピンが、マッチの火に浮かび上がる。男は十八歳の時にニューヨークを捨て一財産作るために西部に行ったという。親友ジミーは身を粉にしてこつこつやるタイプで、誘ったが、一緒に行こうとはしなかった。最後の晩に今は金物店になっている昔のレストランで食事をし、二十年後の今夜、この場所で、きっかり十時に再会する約束をしたのだと、語る。

男は懐中時計を取り出す。小粒のダイヤモンドが蓋一面に散りばめられた時計は、十時三分前を指していた。友人には時間厳守でのぞみますか、と問う警官に、三十分は待つてやるつもりだと男は言う。警官はそこを離れ、パトロールを続けた。

(第二部)

約二十分後、足早にやって来る男がいた。長い外套を着てその襟は耳元まで立てた背の高い男で、待っている男の方へ向かう。二人は互いの名を呼び合い、再会に興奮し、歓喜する。あのレストランはなくなったこと、ボブが西部で一旗揚げたこと、背が伸びたらしいジミーがニューヨーク市当局の一つに勤めていることなど、互いの消息を話す。

背の高い男が知っている所に向けて、二人は仲良く腕を組んで歩き出す。西部から来た男は成功談を得々として語る。もう一方は、外套に顔をうずめ、興味深そうに聴いていた。

やがて、街角のドラッグストアのまぶしい光の中に入る。と同時に、初めて二人はお互いの顔を見つめる。西部から来たボブは、ぴたりと足を止め、腕を放した。「お前はジミー・ウェルズじゃない。二十年は長い年月だが、人の顔が鷲鼻から獅子鼻に変わるほど長くはない」と嘯みつくように言った。すると、背の高い男は「時には善人が悪人になることはあってもな」と応じ、自分はジミー・ウェルズではなく、私服刑事だと明かす。署へ連行する前に、渡してくれと頼まれた書き付けがある。この窓明かりのもとで読め、と言う。受け取った男の手は、読みおえる頃には小刻みにふるえていた。ごく短いメモだった。

"ボブへ。時間きっかりに約束の場所に行った。きみがマッチをすって葉巻に火をつけたとき、その顔がシカゴ市警から指名手配中の男だと分かった。なぜかしらんが、逮捕できなかった。だからその場を離れ、私服刑事に行ってもらうことにした。

ジミーより。"

話は驚きの結末で終わる。終わりに想像もできないような「意外な結末」が待ち受けている。これがサプライズ・エンディングの短篇小説の特色である。

親友のボブとジミーが二十年の人生を経てもみると、一方は「治安の守護者を見事に絵に描いた姿」の警官で、もう一方は指名手配中の男だったというサプライズ・エンディングは、O・ヘンリーが描き込んだ運命の皮肉(irony of fate)である。この終わり方が読者の脳裏に強烈な衝撃を与え、物語を忘れがたいものにする。構成と技巧の妙と言っていい。

III

短篇は、長篇とちがって、短時間で読み通せる短い小説である。悠長な文章を長々と綴る余裕はない。冗長な説明や注釈は抜きである。素早く、登場人物、時間や場所、周囲の状況を読者の頭の中に送り込まなければならない。

『二十年後に』ではそれが冒頭部に的確に手際よく描かれている。警官が巡回中で、通りに人影はまばらだ。寒い、風の強い晩で、時刻が十時少し前。とつくに商店は店じまいをしている。一帯は暗い。が、暗闇に包まれた金物店の入り口に、火のついていない葉巻をくわえた男がいる。巡回中の警官は男に近づく。

ここまでが、この短篇の導入部(Introduction)である。警官と男、寒い夜更けの十時近く、人影の絶えた通りの金物店前、という場面が、読者の脳裏に焼きつく。しかも暗がりにたたずむ不審な男。その男に警官が近づく。ただでさえ背景が暗いうえに、金物店入口の暗闇に立つ男が、不気味である。警官が男に近づくのも無理はない。もうこれだけで、サスペンス(Suspense)すなわち物語の結末を知りたい心的不安をつのらせる。読者は一気に話の核心に吸い込まれる。もうすでに、読者の心は次へと飛んでいる。

次に控えるのが展開部(Development)である。ここは導入部(Introduction)を起承転結の「起」とするなら、「承」の部分に当たる。

不審者だとして職務質問をされると思ったのだろうか、男は「大丈夫ですよ、お巡りさん」と安心させるような口調で切り出し、嫌疑をはらうために事情を説明する。この説明が複数の

出来事を相互に結びつける物語の筋すなわち物語のプロット(plot)を盛り上げる。だが、すんなりとその説明に移らない。ここに作者の秀逸な技巧がひかる。

物語の冒頭で、作者は、暗闇に立つ男に火のついていない葉巻をくわえさせておいた。話がこれから展開するという段になって、やっと、その葉巻に火をつけさせる。

すったマッチの火は、男の青白い角張った顔、鋭い目つき、右眉の白い小さな傷痕、大粒ダイヤの奇妙なネクタイピンを浮かび上がらせる。照らし出されたこの四点から男の素性が浮き彫りになる。やさ男だが自我が強く、抜け目なく、周囲の敵を油断なく眼光鋭く警戒し、体に刃傷沙汰の痕跡をとどめる危険な世渡りによって財をなした押金主義者。そういう男性像を作者はマッチの火でもって読者の頭の中にたたき込む。

葉巻とマッチというささやかな小道具によって描いた風貌描写で、見事に男の人間像をえぐって見せたのだ。O・ヘンリーの技巧の冴えというほかない。

このあと男は、二十年後の今月今夜この場所で会うという約束を果たすためにここに立っている、と警官に説明する。これによって読者に分かることがある。西部へ行ったこの男は奮い立って新たな運命を切り開く一旗組に属し、他方、ニューヨークに留まった親友のジミーはこつこつやるタイプ(plodder)に属するということである。

しかし、警官にとって、それはどうでもよいことだ。男は、ダイヤモンドをちらした時計を取り出し、十時三分前だと言う。警官の興味は、再会を約した刻限きっかりでないと駄目か、というただ一点にある。

男は、三十分は待つてやるつもりだと言う。この返事で警官は納得する。得心して再びパトロールを続ける。

しかし読者は得心できない。三十分は待つてやると言うが、親友のジミーは現れるかという疑問が残る。サスペンスが読者の心に巣くうのだ。

物語の導入部と展開部から成る第一部は、サスペンスをかき立てつつ、以上をもって終わる。

第二部は話の大詰めである。約二十分後に長い外套を着た背の高い男がやって来て、西部の男と感激の対面をし、互いの消息をかわす。そして二人は腕を組んで歩きだす。今来た男が案内する所への道すがら、西部の男は出世話を披瀝し、もう一方は外套の襟に顔をうずめ、それに聞き入る。

この部分は、終結部(Conclusion)を導くための繋ぎの役目を果たす展開部である。第一部の展開部を引き継ぐ同じ展開部だが、読者を一気にクライマックス(Climax)へと引き込むために無くてはならぬ部分である。

話の発端からここまで、作者は、登場人物を夜の闇で包んでいた。ところが初めて、次の瞬間、明々とした光の世界にたたき込む。そこでクライマックスとなる。小説中の一連の事件において最高潮に盛り上がる劇的緊張すなわち山場となるのだ。

長い外套の背の高い男をジミーだと思っていたボブは、腕を放して、「お前はジミー・ウェルズじゃない」と叫ぶ。ここからが起承転結の「結」に当たる終結部(Conclusion)の始まりである。

ドラッグストアのまぶしい光が闇を払った瞬間、ボブはおのれの事実誤認に気づく。光が闇を一掃したのだ。光と闇のトリックで正体を隠しおおせるところがフィクションである。現実なら、たとえ二十年ぶりだったとしても、親友かどうかの判別はつくものだが、小説では、ク

ライマックスを配した終結部まで、警官や刑事の実像を闇で隠し通すのだ。その闇が光へ転じたその時、読者は驚くべき事実を突きつけられる。

それは、連行する前に、刑事が手渡すメモの中にある。巡回中の警官は実はジミーだったこと、指名手配中の犯人ボブは親友であるがゆえに自分は逮捕するに忍びず、刑事に代わってもらったことの二点が述べられている。メモを読んだボブの驚きは、読者の驚きでもある。

O・ヘンリーはこのメモで話を締めくくるが、その短信に友人を思いやった警官ジミーの胸のうちの吐露されているだけに、衝撃的な「驚きの結末」が読者の心に深い余韻を残すのである。

以上の構成を「起承転結」ではなく、能や人形浄瑠璃の構成にたとえて「序破急」と分析してもよい。ここにいう「序破急」とは、速度の序破急ではなく、序（導入部）、破（展開部）、急（終結部）で構成されているという意味である。

この場合、破（展開部）は、巡回中の警官が去るまでと、その二十分後の刑事の到着以後との二つを一つに統合したものである。逆に、それを二分すれば、破（展開部）は、「承と転」に分かれ、「起/承・転/結」という構成となる。後者についてはすでに触れたとおりである。

つまり、物語の構成は「起承転結」としても「序破急」としても差し支えはない。『二十年後に』はいずれの分析をも許容する。それは、じつに堅牢な構造をもつゆるぎのない構成を誇るがゆえである。

最後に特筆すべきは、物語の終結部にサブライズ・エンディングを配した点であろう。この点に触れるまえに、この短篇の意味を解釈しておく必要がある。それを次に考察してみよう。

IV

『二十年後に』では、警官という職を選び、堅実な人生を歩んだジミーに対しては、何の批判もしていない。ところが、ボブに対しては鉄槌を下している。

これは、ボブが法に抵触する罪を犯したからか、それとも立身出世の野望や虚栄心を責めたかったからなのか。その答えは、野望や虚栄心そのものは問題ないが、それが高じて犯罪行為に走った点が鉄槌に値する、となるのかもしれない。

そうだとすると、もちろん、間違いではない。しかし当時の時代に照らすと、批判の目は、ボブのような人間全体に向けられていることが分かる。東部のニューヨークでも、西部のシカゴでも、この手の人間は掃いて捨てるほどいたのである。

そういう人間像を抽出してみせたのが批評家のヴァン・ウィック・ブルックスである。アメリカ人の人間像は、「教養人タイプ(Highbrow)」と「無教養人タイプ(Lowbrow)」の二つのカテゴリーに分類できるという。この二つの人物類型は、アメリカだけに見られ、他国には類を見ない特徴だという。

「教養人タイプ」は、道徳的でその生き方が広く世に認められた優秀な人間である。また、最高の教育を受けた知的エリートである。だがその人生に対する態度はすんなりと世に受け容れられない、というタイプの人間で、ジョナサン・エドワーズ Jonathan Edwards がその例である。他方、「無教養人タイプ」は、容易に話しかけられるいい奴ではある。正規の学校教育はほとんど受けず、激しい競争に打ち勝ってきた人間で、その人物や業績となるとある種の軽蔑感を抱かざるをえない。たとえば、エジソン Edison やロックフェッラー Rockefeller がそうで

ある。

しかしながら、このどちらのタイプも、人々が心から容認し得る人間性を備えてはいないがゆえに、二つの名称には、ある種の軽蔑的な含みが込められている、とヴァン・ウィック・ブルックスは言う。⁴⁾ 以上が、アメリカ人を2つに分類した人物類型である。

『二十年後に』では教養人タイプの人間は登場しない。教養人タイプと無教養人タイプとをぶつけるのではなく、「無教養人タイプ」同士をぶつけている。もちろん、批判の目が向けられているのは無教養人タイプである。だが、その一人である警官ジミーは非難の対象から外されている。それは、ジミーの世界観や人間観が二十年前から変調を来すことなく自我形成をなしおおせたからだろう。その証拠に、警官ジミーは堅実な人生を歩む「治安の守護者」として描かれているのだ。

O・ヘンリーが鉄槌を下すのは、あくなき野望を達成するためには手段を選ばぬ人間に対してである。法に抵触してまでアメリカン・ドリームを追い求めることの行き過ぎは、マッチが照らし出すところの、意志強固な角張った顎、鋭い目つき、眉近くの傷痕、これ見よがしのダイヤモンドに象徴されている。この種の「無教養人タイプ」の人間像を、ボブという架空の人物を籍りて、槍玉に挙げたのが『二十年後に』という作品だと解釈できるのだ。

「ボブという架空の人物を籍りて」と言ったのは、O・ヘンリーが実在の人物に事寄せて架空の人物ボブを仕立てたと考えられるからである。

その人物とは、James Buchanan Brady(1856-1917)である。なるほど該当する実在の人物が、犯罪に手を染めてまで立身出世をしたという証拠は見当たらない。だが「無教養人タイプ」のアメリカン・ドリームの達成者に他ならないのだ。

この男は、ダイヤモンドを熱心に収集したので、Diamond Jim Bradyとも呼ばれた。ホテルの給仕から身を起こし、鉄道用品供給会社の商売で財を成したニューヨーク生まれの大富豪である。美食を愛する健啖家でもあった。人前には滅多に姿を見せなかったという。ともあれ、アメリカン・ドリームを実現した大富豪として名を馳せた。

それが『二十年後に』と何の関係があるのか。じつはボブのモデルと考えられるのだ。両者に共通するのは共にニューヨーク生まれであること。一代で財をなしたこと。ダイヤモンドを熱愛したこと。夜の闇にかくれるかのように人前に出たがらなかったこと。レストランでの友との食事が示唆するように、食を愛する健啖家であったこと。これらが、両者の共通点である。

しかも、約束のレストランの名前は、作品では'Big Joe' Brady's で、この Brady は実業家 Brady の名と同じである。本来ならその異名である'Diamond Jim' Brady's と名付けたかったところであろう。だが、やむなく'Big Joe' Brady's としたのは、1906年当時、本人 James Buchanan Brady がまだ存命だったからである。

まだある。Diamond Jim Brady の Jim は、そのもう一つの愛称形である Jimmy として警官の名前に流用されている点も、今一つの証拠である。かように、Diamond Jim Brady の名前は、『二十年後に』を読み解く暗号(code)だと言わんばかりに、作品の隅々に散りばめられている。ボブのネクタイピンに光る大粒のダイヤモンドは、モデルとなった人物の象徴でもある。O・ヘンリーの脳裏には、当時、ニューヨークで一世を風靡していた、時の人、Diamond Jim Brady そのものがしっかりと意識されていたことは疑いない。

以上の事情から、ボブの人間像は読者に Diamond Jim Brady を想起させて余りあるので、ボブの惨憺たる結末を詳述するのは、まずい。だから作者は、衝撃的事実を開示したその瞬間

に筆を擱く。つまりサブライズ・エンディングの瞬間に物語を閉じるほかはない。O・ヘンリー自身はそこで口をつぐむのだ。そしてボブへの批評はいつい読者に任せてしまう。

ところが、後世、ボブのモデルと思しい人間像を酷評した作家がいる。ノーベル賞作家ジョン・スタインベック John Steinbeck(1902-68)である。こう評している。

世間はアメリカの金持ちの人物像をこよなく愛している。……(中略)……でぶっちょで、思いのままに金を使い、悪徳で、シルクハットをかぶり、宝石をキラキラ輝かせる大泥棒たち。ダイヤモンド・ジム・ブレイディー、ラッキー・ボールドウィン、リーランド・スタンフォードに類する者たちがそうである。美女たちをはべらせ、駿馬をそろえ、立派な館を幾つも持っている。金持ちで、またそのことが自慢で、どんな金持ちかを世間に見せびらかして得意になっていたのだ。前世紀の後半において、この手の活気溢れる、がさつな人物たちは忌むべき対象であり、また、光彩をはなつ時代の看板でもあったが、そのあと、何かが起き、みな、姿を消した。鉄道王、石油王、鉄鋼王そして銅鉱王は、巨人となり、憎まれ、賞讃された果てに、消えていったのである。⁵⁾

ここでスタインベックが指弾しているのは「たたきあげの大金持ち」(self-made millionaires)である。その多くは、南北戦争以後、アメリカが農業国から工業国へと脱皮した十九世紀後半に台頭して消えていった新興成金たちだった。

ダイヤモンド・ジム・ブレイディーはその典型である。人生経歴として、金とあくどさにおいてボブほどに小者ではないものの、本質は同じである。

双方がぴったりと一致すれば、ただいま立証しようとする事への説得力となる。だが文学の世界では、それでは、フィクションというものが成り立たない。なぜなら、フィクションとは現実に基づいた事実無根によって成り立つ真実を伝える世界だからだ。⁶⁾ 現実根拠した事実無根によって真実を伝えようとするのがフィクションである。したがって、双方がピッタリ一致するのは、フィクションとしては、むしろ危険極まりない。

ただし、フィクションは、荒唐無稽な文言をつらねた突拍子もない世界ではない。現実根拠した想像力の産物だからこそ迫真性は生まれる。つまり、「思いのままに金を使い、悪徳で…宝石をキラキラ輝かせ」る「金持ちであり、またそのことが自慢で、どんなに金持ちかを世間に見せびらかして得意になる」「活気溢れる、がさつな人物」を描くには、現実の「たたきあげの大金持ち」をモチーフに、ダイヤモンドをひけらかすボブという架空の人物を仕立てるほか道はないのだ。だからこそ、実在の人物ダイヤモンド・ジム・ブレイディーは、ボブだと同定できるのである。

その対局に、警官ジミーが配されている。勇氣、誠実、正義感、忍耐、礼節、惻隱の情をもった人物像が設定されているのだ。「驚きの結末」で、O・ヘンリーは、言うなれば、ダイヤモンド・ジム・ブレイディーと地味な警官ジミーをぶつける。一切のコメントを控えたサブライズ・エンディングという形式で両者をぶつける。

このことによって初めて、現実生きた者どもの拝金主義の悪徳を、ボブというフィクション上の人物を籍りて、糾弾できる。これがこの短篇で最後に開示された総括的意味であると解釈できるのである。

ボブの場合、二十年前にニューヨークを捨て西部へ行った。こんにちでは西部は、ミシシッ

ピ河以西の諸州をさす。だがこの頃はシカゴが西部だった。⁷⁾ ニューヨークの真西に位置するシカゴは、当時すでにイリノイ・ミシガン運河や東西を結ぶ鉄路が完成し、物流の中心地として飛躍的發展を遂げていた。

十九世紀後半のアメリカは、農業生産性はきちんと維持、あるいは向上させつつ、農業利益主体の農業国アメリカから工業利益主体の工業国アメリカへと脱皮した時代であった。それを象徴したのが 1893 年のシカゴ万国博覧会だった。イギリスを抜いて世界に冠たる工業国アメリカを見せつけたのだ。⁸⁾

そのシカゴでボブが一財産つくった手立てはというと、いっさい描写がない。これは、冗長な説明や注釈は抜きでいっきよに話を展開する短篇小説の常套手段なのだ。いきおい読者は、行間からそれを読み取るしかない。最低限のところ、つまり、世知に長けたボブはこの地に身を投じ、危ない橋を渡って財をなしたと推測できる。

その検証として、質が甚だ落ちて言うもはばかれるが、ボブに輪をかけたワルが現れる。時代はボブより少しあとになる。ブルックリン生まれのアル・カポネ Alphonse Capone (1899-1947) がそうである。禁酒法時代のカポネは、ビッグ・ジム・コロシモ Big Jim Colosimo の参謀、トリオ Torrio、の招きに応じてニューヨークを捨て、シカゴに渡り、暗黒街に君臨した。⁹⁾ 親友との再会の約束を律儀に果たそうとするボブは、アル・カポネほどの冷血漢ではないし、頬の傷痕以外に血なまぐささも感じられない。しかし、人生の裏街道の闇がまわりついていることは否定できない。

野心と虚栄心に突き動かされ一攫千金を夢見てアメリカン・ドリームを達成した者たちではあっても、スタインバックが言うように、腹黒さによって金銭的成功をおさめ、湯水のごとく金を使い、高価な宝石を見せびらかし、巨万の富を自慢してはばからなかった大泥棒たちであった。金ぴか時代にあつては、およそ富は道徳の人間のみにもたらされるものだという風潮があつたのは、歴史的事実である。¹⁰⁾ だが、その風潮にのって、法を犯してまで金銭的成功を求めたのであれば、断罪されて当然だろう。

だが、敢えてこの点の詳述を控えて O・ヘンリーは、運命の皮肉という形でボブに鉄槌を下すサプライズ・エンディングで以ってそれを代用し、物語を閉じている。それが『二十年後に』だと解釈できる。

V

最後にサプライズ・エンディングの短篇小説とは何かを考えてみよう。まず、サプライズ・エンディングは、物語の最後で、それまで秘めていた事実をいっきよに放出して意表を突いて終わる。それだけに、結末そのものの信憑性が問われ、疑念を抱かれることが多い。

信憑性という点について、疑念をもたれた作家にモーム W. Somerset Maugham がいる。手始めに、モームへの非難とその反論から紹介する。

まず、作家が「物語る出来事は、現実にあるような出来事であるばかりか、可能な限り、必然性のある出来事でなければならない」し、ましてや「読者を驚かせること」などあつてはならぬ、という非難があつた。モームはサプライズ・エンディングの短篇も書くし「読者を驚かせること」がよくあつたので、この種の攻撃を受けたのである。モームは反撃する。「世間の人々は、北極へ出かけて行って冰山から墜落するといったようなことをやりはしない」と言うけれ

ども、「現に北極へ出かけて行くではないか。冰山から墜落しないまでも、それに劣らぬ恐ろしい冒険を経験するではないか」と論駁を加える。「読者を驚かせること」つまりサプライズ・エンディングは、現実世界にいくらかも転がっている、と言いたいのだ。¹¹⁾

次にあげるモーパッサン Maupassant の『首飾り』"The Necklace"も例外ではない。これも「驚きの結末」で有名な短篇小説である。話のあらましはこうである。

美貌の女性だが家庭が貧しかった。平凡な結婚を余儀なくされ、凡俗な結婚生活に明け暮れる。夫はたまには妻を喜ばせようと、舞踏会の券を送る。出かける準備が大変だった。余裕のない生活なので、服や靴はそろえたものの、首飾りまでは買えず、女学校時代の友だちから借りる。貴人が集まった舞踏会でこの美貌の妻は注目の的だった。が、帰宅してハッと気づいた。ダイヤの首飾りがない。夫と共に血眼で八方探すがどこにも無い。やむなく、パリじゅうの宝石店を探してやっと同一物を見つけ、借金して買い、首飾りを女友達に返した。苦勞してやっとの思いで借金の返済を終えた。十年が経っていた。そのある日、向こうから来る当の女友達とばったり出会う。子どもの手を引くその友は、若々しい。十年の勞苦で、自分の美貌は消えた。借金を返した喜びからか、思い切って、首飾りとこれまでの顛末を打ち明ける。「やっとな借金を返したのよ」と言った。すると、友のいわく、「まあ、あのネックレスは模造品だったのよ。たかだか五百フランだったわ。」¹²⁾

このサプライズ・エンディングに激怒した節があるのが、わが漱石である。漱石は難色を示し、こう評する。

此落チガ、嫌デアル。コゝニ至ツテ今迄ノイゝ感ジガ悉ク打チ壊サレテ仕舞フ。ナゼモーパッサンはかうだろう。此一節ガナケレバ夫婦ノ辛苦シタノハ全ク義理堅イ美德デ輕薄ナル細君モ此出来事ノ為メニ真正ナル人間トナツタノダカラ、読者モ非常ニ同情ヲモツテ讀ンデ行カレルノニ、此結末ノ一節ノ為ニ夫婦ハ丸デ馬鹿ニサレテ仕舞フ。ツマリ毫モ利目ノナイ美德ヲツクシテ居タノデアル。(中略)モーパッサンは何ヲ苦シンデ此夫婦ノ美德ヲ殺シテ仕舞ツタノカ分ラナイ。¹³⁾

結末で首飾りが模造ダイヤだったと開示し女主人公を「嘲笑や罵倒」して喜ぶことは不見識である。だいいち「深厚な同情」がない。また「読者迄馬鹿にされた様に思はれ」て何だか嫌な感じがする、と漱石は言う。¹⁴⁾『首飾り』の結末は、散々な評価である。

以上の二つの例からも、サプライズ・エンディングの終わり方には疑念をもたれる傾向が強いと感知できる。一步間違えば、非難のつぶてが飛んでくるのだ。

なぜなら、周到に隙間なく伏線(Underplot)を張りめぐらし、馬鹿馬鹿しい読者騙しにならぬようトリックを練り上げ、スリルとサスペンスをかき立てておいて、結末でいきよに意外な事実を突きつけるのだが、その瞬間に「作者の意図と作品全体の構成と意味とを明示」し、読者が「これまでの物語のなかのすべての部分的要素が互に関連しあつて全体的な統一を保っていたことが理解できる」ように仕立てたフィクションでなければならず、それこそが、サプライズ・エンディングの短篇小説の成立要件だからである。¹⁵⁾

では、そもそも短篇小説とは何であるか。この疑問に明快に答えてくれるのが、アン・チャーターズ女史である。その解答は、文学とは何かという疑問にも迫る勢いがある。女史は見事にこう説明する。

短篇小説という文学形式は、多くの場合、筋の通った話一つに係わる散文体の短い架空の物語だと定義されるのが普通である。私たちが人生で経験する膨大な出来事の総体が、たった一つの印象に統一されることはないで、ある意味では、すべてのフィクションは、短篇、中篇、長篇を問わず、「うそばかり」で成り立っているということになる。しかし逆説的に響くかもしれないが、すべてのフィクションが首尾よく成功するか否かの尺度は、そのフィクションがいかに本物然として私たちの感情に迫ってくるかにかかっている。つまり、フィクションの成否は、私たち皆が生きている人生をいかに正確に反映しているにかかっているのである。¹⁶⁾

要するに短篇小説とは、話柄を一つにしぼって散文体で綴った短い架空の物語である。架空の物語つまりフィクションだから「うそばかり」には違いないが、事実立脚している本物然とした信憑性のあるフィクションに仕立てられた物語のことだ、という結論になる。

中でも、「読者がある衝撃感をおぼえるような物語の結末」¹⁷⁾を有するものがサプライズ・エンディングの短篇小説である。とはいえ、モームやモーパッサンが受けた非難から見て取れるように、物語の最後をサプライズ・エンディングで締めくくことは容易ではない。なぜなら、「驚きの結末」が功を奏するためには、読者の感情にうったえるだけの情緒的深みもなければならぬからである。

ストーリーの構成を信憑性を帯びた構造物になるように組み上げ、そこへ至るまでの話の流れを迫真性に富んだ緻密なプロットに仕立てあげなければならない。そして物語の最後を運命の皮肉にみちたサプライズ・エンディングで飾るものであり、その結末が読者の期待値を外すに十分な「驚き」をはらんでいる必要がある。それでもなおかつ、信憑性をあやうくするような要素や筋立てを排除し、迫真性があり、同時に、読者の心に深い感銘を与えるだけの蓋然性をもつものでなくてはならない。それがサプライズ・エンディングの短篇小説であり、そのあるべき姿でもある。

この意味で、O・ヘンリーの短篇の中でも『二十年後に』はサプライズ・エンディングの短篇小説としては最も質の高い傑作だと言える。

註

- 1) Ray B. West, *The Short Story in America 1900-1950* (1952; New York: Arno Press, Inc., 1979) 3.
- 2) Elias Lieberman, *The American Short Story* (1912; New York: AMS Press, Inc., 1970) 163.
- 3) 本論ではO・ヘンリーの作品はすべて、*The Complete Works of O. Henry* (Kingswood, Surrey: The Associated Bookbuyers' Company, 1928)に拠る。なお、この3つの短篇は1906年刊行の短篇集 *The Four Million* に収められたもの。表題は1900年の国勢調査でニューヨーク市が人口344万だったことに由来し、『ニューヨーク市四百万の人たち』という意味。もちろん the Four Hundred (上流社会の人々、の意)の向こうを張った表題であり、ニューヨークをこよなく愛した大衆作家 O. Henry がこの都市の名士たちを揶揄した名付けだと考えてよい。斎藤真ほか監修

- 『新訂増補版アメリカを知る事典』(1986;平凡社, 2003) 355 及び亀井俊介『ニューヨーク』(岩波新書, 2002) 142-44 を参照のこと。
- 4) Van Wyck Brooks, *Three Essays on America* (1934; New York: D. P. Dutton & Co., Inc., 1970) 15-35.
 - 5) John Steinbeck, *America and Americans* (New York: The Viking Press, 1966) 68.
 - 6) この点は、「フィクションはすべて現実に基づいている(All fiction has its basis in reality.)」と明言している Liebermann, *The American Short Story* 1 を参照。
 - 7) 本件に関しては猿谷要『検証アメリカ 500 年の物語』(平凡社, 2004) 96 を参照のこと。「初めのうち西部というのは、漠然とアパラチア山脈の西に広がる大地を指していた。しかし開拓の最前線(フロンティア)が西へ移動するにつれて、西部の概念も西へ移動する。」
 - 8) 斎藤眞『アメリカとは何か』(1995; 平凡社, 2003) 58-59 を参照のこと。
 - 9) 小田基『禁酒法のアメリカ: アル・カポネを英雄にしたアメリカン・ドリームとはなにか』(PHP: 1984) 139-55.
 - 10) 斎藤『アメリカとは何か』 62-64 を参照のこと。
 - 11) W. S.モーム著西川正身訳『世界の十大小説(下)』(1960; 岩波新書, 1972) 318-20.
 - 12) Guy De Maupassant, "The Necklace" in Cleanth Brooks and Robert Penn Warren, *Understanding Fiction*, 2nd ed., (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc., 1971) 106-12.
 - 13) 『漱石全集』第十六巻別冊(岩波書店, 1967) 140-41.
 - 14) 同上書, 550-51.
 - 15) 元田脩一『アメリカ文学研究: 批評論と作品論』(開文社, 1978) 51 参照。
 - 16) Ann Charters' "Introduction to Short Fiction," in Ann Charters, ed., *The Story and Its Writer*, 2nd ed., (New York: St. Martin's Press, 1987) 3.
 - 17) Brooks and Warren, *Understanding Fiction* 687.

A Short Story with a Surprise Ending

—With Special Reference to O. Henry's "After Twenty Years"—

KANEKO Mitsushige

Abstract

The short story is a literary form or a form of fiction produced in America rather than in Britain. There was a great call for short stories in the earlier decades of the 19th century. The rapid growth in territory and in population created a growing demand for reading matter such as periodicals, gift books and literary annuals, to name a few. Thus the short story was drafted in for them. This contributed to the establishment of the short story as a literary genre in America.

Among those short stories there is one called "a short story with a surprise ending." O. Henry wrote so many a story of this kind that such one came to be also called "a short story with O. Henry's ending."

In this paper I have tried to analyze his skillful technique for finishing "After Twenty Years" with a twist ending and also to find out what its message is all about. The surprise ending enables the reader to understand that even in those days there seemed to be not a few who tried to realize the American dream by taking any inappropriate or illegal measures, and that they should have been punished.

In order for the short story with a surprise ending to be justified, the body of the short story must be expressive, functional and full of verisimilitude. Above all, it is vital for such a short story to successfully convince each and every reader that whatever happens in the story will occur to many readers of the story.

【Key Words】 short story, surprise ending, O. Henry